

改善方策実施計画書

担当部局：文学部

責任者：文学部長

幹事：文学部事務室

2012年3月30日

認証評価指摘事項	【全学】【総評】「女子の入学比率を高める」および「中国以外の地域からの留学生の増加をはかる」という目標は、一部学科による女子高訪問や募集活動の実施にもかかわらず達成されていない。					
点検・評価問題点	文学部は女子の比率はほぼ50%であり問題はないが、「中国以外の地域からの留学生の増加をはかる」という目標は必ずしも十分には達成されていない。					
改善方策	4-7-9(新規) 中国以外の地域への情宣方法を検討し、入試課や国際交流センターと相談した上で中国以外の地域からの留学生の増加を図る。					
計画	前期		中期		後期	
	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
2010年度実施計画			達成時期	2010年度取り組み結果		
なし				A 完全に達成	B 達成半ば	○ C 未達成
				(B または C の理由) 今回の認証評価の指摘で初めて問題点を認識した。		
2011年度実施計画			達成時期	2011年度取り組み結果		
文学部内に入試委員会などを設けて、現在の問題点の検証と改善策を検討する。			2011. 11	A 完全に達成	B 達成半ば	○ C 未達成
				(B または C の理由) 東日本大震災があり、特に、福島第一原子力発電所の事故のために、既に留学していた学生が帰国するという事態も起きている。新たに日本に留学生を迎えるためには、種々の取り組みが必要と考えられる。		
2012年度実施計画			達成時期	2012年度取り組み結果		
改善に向けて大学の関係部署(入試課や国際交流センターなど)と相談し、具体的な改善策を作成する。			2012. 11	A 完全に達成	○ B 達成半ば	C 未達成
				(B または C の理由) 3-19-14 の課題とも関連する問題であり、根本的に課題自体についての検討を要する。		
2013年度実施計画			達成時期	2013年度取り組み結果		
課題の再検討を進める。			2013. 3	A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成
				(B または C の理由)		
2014年度実施計画			達成時期	2014年度取り組み結果		
				A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成
				(B または C の理由)		
2015年度実施計画			達成時期	2015年度取り組み結果		
				A 完全に達成	B 達成半ば	C 未達成
				(B または C の理由)		

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	【総評】「女子の入学比率を高める」および「中国以外の地域からの留学生の増加をはかる」という目標は、一部学科による女子高訪問や募集活動の実施にもかかわらず達成されていない。
点検・評価問題点	文学部は女子の比率はほぼ50%であり問題はないが、「中国以外の地域からの留学生の増加をはかる」という目標は必ずしも十分には達成されていない。
改善方策	4-7-9(新規)中国以外の地域への情宣方法を検討し、入試課や国際交流センターと相談した上で中国以外の地域からの留学生の増加を図る。

(2011年3月31日現在)

【現状の説明】

今回の認証評価の指摘で初めて問題点を認識した。

平成22年度に文学部に在学した留学生21名のうち中国以外の地域出身者は2名である（韓国1名、マレーシア1名）。また平成22年度に文学部に在学した交流学生6名のうち中国以外の地域出身者は4名である（韓国1名、台湾2名、マレーシア1名）。

所見	2011年度からの改善が進捗することを期待する。
----	--------------------------

(2012年3月31日現在)

【現状の説明】

平成23年度に文学部に在学した留学生25名のうち、中国以外の地域出身者は3名（韓国1名、マレーシア1名、トンガ1名）である。また平成23年度に文学部に在学予定だった交流学生6名のうち、中国以外の地域出身者は5名（台湾1名、韓国2名、フィンランド2名）である。平成23年3月11日に起こった東日本大震災及び、それに続く福島第一原子力発電所の事故による放射能被害が世界的ニュースとなったこともあり、新たに日本への留学生を迎えるための方策は、再度練り直す必要があると考えられる。

所見	文学部、特に日本文学科、書道学科は、日本文化に関心のある海外の学生にとっては大変魅力ある科目を提供しているので、多言語による広報活動などを通じて世界に学部活動や研究成果を発信していくことが今後期待されます。
----	---

(2013年3月31日現在)

【現状の説明】

【日本文学科】日本文学への海外からの留学生については、今後とも、努力を続ける所存である。

【中国学科：B 達成なかば】中国以外からの留学生が、中国学を学ぶ場合、中国本土への留学が普通であるが、次年度はインターネットを使って発信していく。

【英米文学科】英米文学科は比較的女子学生の比率は多いと思われるが、さらなる増加を図るべく、女子に人気がある英米児童文学研究、女性学が盛んであることを英米文学科の特徴として情宣している。「中国以外の地域からの留学生の増加をはかる」という目標については、英米文学科へのフィンランドからの交換女子留学生が2名いる状態である。

【教育学科】2013年度入試では社会人入試希望者があり、積極的に受け入れた。

【書道学科】書道学科には台湾からの交換留学生が毎年1名以上在籍している。書道学科への留学生ではないが、書道学科と大学院書道学専攻と連動して、中国以外の世界への広報活動や研究成果が地道に図られている。

平成24年度に文学部に在学した留学生31名のうち、中国以外の地域出身者は3名（韓国1名、マレーシア1名、イギリス1名）である。

当該課題については、3-19-14とも関連するものであり、再検討を要するという意見が多い。協議を重ねたい。

所見	文学部の、そして文学部各学科の、それぞれの特色が海外から見て分かりやすくなるような情報
----	---

発信が期待されます。

改善方策実施計画書

担当部局：文学部

責任者：文学部長

幹事：文学部事務室

2012年3月30日

認証評価指摘事項	【全学】【総評】社会人入試を実施している学部もあるが、入学実績はほとんどない。					
点検・評価問題点	文学部では、社会人入試を実施している学科もあるが、学部全体として入学者の増加を図る。					
改善方策	4-7-10(新規) 文学部全体で社会人入試の現状を把握して、問題点を検証し解決案を検討した上で、学部全体として入学者の増加を図る。					
計画	前期		中期		後期	
	2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度
2010 年度実施計画		達成時期	2010 年度取り組み結果			
なし			A 完全に達成	B 達成半ば	○	C 未達成
			(B または C の理由) 今回の認証評価の指摘で初めて問題点を認識した。			
2011 年度実施計画		達成時期	2011 年度取り組み結果			
学科主任会議で問題点を検証し解決案を検討する。 学科協議会で協議する。 文学部教授会で承認する。 大学の入試委員会に提示して承認を得る。	2011. 6 2011. 9 2011. 10 2011. 11		A 完全に達成	B 達成半ば	○	C 未達成
			(B または C の理由) 今年度は、この問題を協議するための時間を持てなかった。			
2012 年度実施計画		達成時期	2012 年度取り組み結果			
実施する。問題点を検証し、関係各部署とも協議し、 実現可能な解決案を導き出す。	2012. 11		A 完全に達成	B 達成半ば	○	C 未達成
			(B または C の理由) この課題自体についての、再検討を要するという意見があるため、協議を重ねて行く。			
2013 年度実施計画		達成時期	2013 年度取り組み結果			
課題についての協議を行い、方向性を検討する。			A 完全に達成	B 達成半ば		C 未達成
			(B または C の理由)			
2014 年度実施計画		達成時期	2014 年度取り組み結果			
			A 完全に達成	B 達成半ば		C 未達成
			(B または C の理由)			
2015 年度実施計画		達成時期	2015 年度取り組み結果			
			A 完全に達成	B 達成半ば		C 未達成
			(B または C の理由)			

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	【総評】社会人入試を実施している学部もあるが、入学実績はほとんどない。
点検・評価問題点	文学部では、社会人入試を実施している学科もあるが、学部全体として入学者の増加を図る。
改善方策	4-7-10(新規)文学部全体で社会人入試の現状を把握して、問題点を検証し解決案を検討した上で、学部全体として入学者の増加を図る。

(2011 年 3 月 31 日現在)

【現状の説明】

今回の認証評価の指摘で初めて問題点を認識した。

過去の社会人入試状況は以下のとおりである。

2011 年度 1 名（中国学科 1）、2010 年度 0 名、2009 年度 2 名（英米文学科 1、書道学科 1）、2008 年度 1 名（中国学科 1）、2007 年度 1 名（中国学科 1）、2006 年度 0 名、2005 年度 1 名（教育学科 1）

所見	2011 度からの改善が進捗することを期待する。
----	--------------------------

(2012 年 3 月 31 日現在)

【現状の説明】

2012 年度社会人入試の結果は、0 名であった。

改めて社会人入試のニーズについてリサーチする必要があると考えられる。今年度はそのための時間も協議する時間も配分できなかった。一般的には、比較的高額な学費を支払った上で、なおかつ勉学の意欲を持ち、学士号取得を目指す社会人の発掘をどのように進めるか、そのために大学は何かが可能か、そういう観点から検討を進めたい。

所見	学生の基礎学力低下を背景に、導入教育における基礎学力の底上げを念頭においたカリキュラムを組む学科が増えています。そのような現状の中で、相当の基礎学力があると予想される社会人をどのように受け入れていくのかを検討する必要があるのではないかと考えます。
----	---

(2013 年 3 月 31 日現在)

【現状の説明】

【日本文学科】今日の低迷する日本社会の経済状況では、社会人入学はとても期待できない。

【中国学科 : B】大学院に社会人入試で入学した学生に、志望動機を聞き、社会人を集める方策を協議した。次年度はそれを HP 等を利用して発信していく。

【英米文学科】2009 年度以来、社会人の入学はない。英米文学科各教員が学外で開催される社会人対象の講演や講座等で情宣をしているが効果がないのが現状である。

【教育学科】

【書道学科】書道学科では、毎年社会人入試による受験者が数名おり、積極的に受け入れようとするものの、近年は高齢者の受験者が多く、実力が伴わず合格していない。社会人のニーズはあるが、単純に受け入れられない状態である。

2013 年度社会人入試の結果は、志願者 2 名（教育学科と書道学科）のうち合格 1 名（教育学科）であった。

この課題についても、根本的に見直す必要があるという意見が多い。社会人が正規入学し、卒業したとしても、それ以降の進路等についての具体的指針を持つ事は極めて困難である。大学卒の肩書を得るため、向学心を満足させ

るため、という理由だけでは、高額な学費を支払って挑戦する人は多くはないであろう。より費用のかからないカルチャセンター等で済むことにもなる。制度として門戸を開いておく必要はあろうが、受け入れ人数を増加させるという目的は、再検討していきたい。

所見	全国的に見ても、社会人入学者の数は平成 20 年をピークに減少しているようである（文科省 HP）。社会人受け入れ人数増加という目標そのものを考え直す必要はありますが、文学部全体として社会人入学に対して後ろ向きであるように見受けられます。制度として門戸は開いておく以上、いつ社会人が志願することがあっても受け入れられる体制は整えておくことが求められます。
----	--

改善方策実施計画書

担当部局：文学部

責任者：文学部長

幹事：文学部事務室

2012年3月30日

認証評価指摘事項	【全学】【総評】入学定員に対する入学者数比率および収容定員に対する在籍学生数比率が、一部の学部および大学院研究科において超過もしくは未充足となっているので、入試の検証体制を充実させることなどにより、適正な定員管理をすることが望まれる。									
点検・評価問題点	入学定員に対する入学者数比率および収容定員に対する在籍学生数比率を適切に管理する。									
改善方策	4-8-9(新規) 入試方法の多様化にともない、合格者の入学手続き率の予想が困難になって来ているが、過去の実績などを精密に分析して、適正な定員管理を行う。									
計画	前期		中期		後期					
	2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度				
2010 年度実施計画			達成時期	2010 年度取り組み結果						
なし				A 完全に達成		B 達成半ば		○	C 未達成	
				(B または C の理由)						
				評価結果を受けて、改善方策を見直した。						
2011 年度実施計画			達成時期	2011 年度取り組み結果						
2012 年度入学予定者について適正な定員管理に努める。			2012. 3	A 完全に達成		○	B 達成半ば		C 未達成	
				(B または C の理由)						
				過去数年間の詳細な資料に基づき、各学科において可能な限り厳密な入学許可数を発表しているが、完全に想定通りの数とはならない部分もあるため、苦慮するところでもある。						
2012 年度実施計画			達成時期	2012 年度取り組み結果						
2013 年度入学予定者について適正な定員管理に努める。			2013. 3	○		A 完全に達成		B 達成半ば		C 未達成
				(B または C の理由)						
2013 年度実施計画			達成時期	2013 年度取り組み結果						
				A 完全に達成		B 達成半ば		C 未達成		
				(B または C の理由)						
2014 年度実施計画			達成時期	2014 年度取り組み結果						
				A 完全に達成		B 達成半ば		C 未達成		
				(B または C の理由)						
2015 年度実施計画			達成時期	2015 年度取り組み結果						
				A 完全に達成		B 達成半ば		C 未達成		
				(B または C の理由)						

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	【全学】【総評】入学定員に対する入学者数比率および収容定員に対する在籍学生数比率が、一部の学部および大学院研究科において超過もしくは未充足となっているので、入試の検証体制を充実させることなどにより、適正な定員管理をすることが望まれる。
点検・評価問題点	入学定員に対する入学者数比率および収容定員に対する在籍学生数比率を適切に管理する。
改善方策	4-8-9（新規）入試方法の多様化にともない、合格者の入学手続き率の予想が困難になって来ているが、過去の実績などを精密に分析して、適正な定員管理を行う。

(2011 年 3 月 31 日現在)

【現状の説明】

毎年、過去 5 年間の数字をもとに、各学科において定員充足に努めている。2011 年度は、定員の 1.20 倍とした受入れ数に対して日本文学科 98%、中国学科 98%、英米文学科 98%、教育学科 102%、書道学科 103%となっており、文学部全体としても適正な数値に落ち着いた。

所見	2011 年度からの改善が進捗することを期待する。
----	---------------------------

(2012 年 3 月 31 日現在)

【現状の説明】

毎年、過去 5 年間の数字をもとに、各学科において定員充足に努めている。2012 年度は、定員の 1.24 倍（124 %（書道学科は 1.23 倍））とした受入れ数に対し、日本文学 120%、中国学科 120%、英米文学科 126%、教育学科 145%、書道学科 113%となっており、教育学科が定員を大きく超過し、結果的に文学部全体としては 691 名、126%に落ち着いた。

所見	教育学科の受け入れ人数超過の原因は、歩留まり率が予想以上に低かったことでしょうか。受原因の分析結果についても記述してください。
----	---

(2013 年 3 月 31 日現在)

【現状の説明】

【日本文学科】日本文学科では、定員 150 名対する受け入れ目標を常に継続維持している。

【中国学科：B】定員削減にむけて、提言した。

本学科の入試において、重要な位置を占める OB・OG 推薦入試について、推薦者の高校教員に被推薦者の学生を派遣し、現状を報告させた。

【英米文学科】英米文学科の定員数は特に問題点はなく、100 パーセントを超える実績を上げている。

【教育学科】2012 年度の教育学科の入試では、歩留まりが予想以上に高くなり、結果として入学者の超過になった。2013 年度は前年度の数値から考慮し、過去数年より合格者数を絞り、目標とする入学者に近い合格者を出すことができた。

【書道学科】書道学科は、2000 年度の創設以来ずっと 100%を超える実績を上げており、定員を充足している。

過去 5 年間の数字をもとに、各学科において定員充足に努めている。2013 年度の受入目標数・手続き者数（受入率）は次のとおりである（3 月 25 日現在）。日文：175 名・175 名（100%）、中国：117 名・106 名（91%）、英米：152 名・157 名（103%）、教育 128 名・128 名（100%）、書道：70 名・68 名（97%）。

所見	文学部各学科において、適切な受け入れ人数確保のための様々な努力が見受けられます。
----	--

改善方策実施計画書

担当部局：文学部

責任者：文学部長

幹事：文学部事務室

2012年3月30日

認証評価指摘事項	【全学】【総評】退学者および除籍者が少なくないので、1、2年次生に対する学修指導・生活指導の徹底など、退学者を減らすための一層の努力が求められる。					
点検・評価問題点	退学者および除籍者が少なくないので、1、2年次生に対する学修指導・生活指導の徹底など、退学者を減らすための一層の努力が求められる。					
改善方策	4-9-3(新規) 1、2年次生に対する学修指導・生活指導を徹底する。					
計画	前期		中期		後期	
	2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度
2010 年度実施計画		達成時期	2010 年度取り組み結果			
出席・成績不良者に対して、教員が個別的に学修指導・生活指導を徹底して行う。		2010. 12	☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由) 全ての出席・成績不良者に対して、教員が個別的に学修指導・生活指導を徹底して行い、退学者の数を半減させた。			
2011 年度実施計画		達成時期	2011 年度取り組み結果			
引き続き出席・成績不良者に対して、教員が個別的に学修指導・生活指導を徹底して行う。		2011. 12	☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由)			
2012 年度実施計画		達成時期	2012 年度取り組み結果			
引き続き出席・成績不良者に対して、教員が個別的に学修指導・生活指導を徹底して行う。		2012. 12	☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由)			
2013 年度実施計画		達成時期	2013 年度取り組み結果			
			☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由)			
2014 年度実施計画		達成時期	2014 年度取り組み結果			
			☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由)			
2015 年度実施計画		達成時期	2015 年度取り組み結果			
			☐ A 完全に達成	☐ B 達成半ば	☐ C 未達成	
			(B または C の理由)			

改善方策経過報告書

認証評価指摘事項	【全学】【総評】退学者および除籍者が少なくないので、1、2年次生に対する学修指導・生活指導の徹底など、退学者を減らすための一層の努力が求められる。
点検・評価問題点	退学者および除籍者が少なくないので、1、2年次生に対する学修指導・生活指導の徹底など、退学者を減らすための一層の努力が求められる。
改善方策	4-9-3(新規) 1、2年次生に対する学修指導・生活指導を徹底する。

(2011年3月31日現在)

【現状の説明】

過去3年間の退学者数（除籍含む）の推移は以下のとおりである。（人数の右側の数字は退学率）

2010年度 96名 3.57%（日文25名 3.30%、中国20名 4.18%、英米27名 4.15%、教育18名 3.33%、書道6名 2.25%）

2009年度 66名 2.50%（日文25名 3.31%、中国11名 2.42%、英米16名 2.56%、教育9名 1.67%、書道5名 1.94%）

2008年度 80名 3.03%（日文30名 3.90%、中国11名 2.43%、英米26名 4.14%、教育11名 2.02%、書道2名 0.82%）

そして、2年次の退学者数と退学者に占める割合は、2010年度 48名 51.1%、2009年度 29名 43.9%、2008年度 37名 46.3%となっている。

所見	2011年度からの改善が進捗することを期待する。
----	--------------------------

(2012年3月31日現在)

【現状の説明】

各学科いずれも1、2年次必修科目担当や学科主任が、個々の修学状況に基づいて、随時面談指導している。面談の効果はあるが、しばらくすると欠席するようになる学生も多く、さらに検討が必要である。2012年度から東松山校舎に開設する文学部TAルームは、大学院生という先輩によるサポート体制であり、学習支援が主目的であるが、副次的な効果も期待している。

2011年度の退学者数（除籍含む）は以下のとおりである。（人数の右側の数字は退学率）

105名 3.98%（日文30名 4.03%、中国31名 6.31%、英米27名 4.34%、教育8名 1.57%、書道9名 3.27%）

所見	文学部TAルームの開設は大変評価できる対策でありますので、より多くの学生にも知られるように、教員を通じての情報伝達を徹底されることが望まれます。
----	--

(2013年3月31日現在)

【現状の説明】

【日本文学科】日本文学科は、常に学科協議会の議題として「学生動向」を諮り、1、2年生のみならず3、4生についても出席状況を確認し合っている。出席の芳しくない学生については、1、2年生は基礎演習のクラス担任、3、4年生はゼミ担当教員を中心に学生と連絡を取り合い、さらに職員からも学生自身への連絡、親への連絡、主任との面談という体制で取り組んでいる。

【中国学科：A】今年度も必修科目担当や学科主任が、随時面談し指導をしている。文学部TAルームを設置し、大学院生を配置して、学生の学習相談を行っている。

【英米文学科】英米文学科では、学科オリジナルのハンドブックを作成、配布して、初年次教育に力を注ぎ、一定の効果を出している。二年次学生への対応として Freshman Seminar の再履クラスを配置している。また学期中、英文学専攻の大学院生二名が週一日、東松山校舎のTAルームに出向き、英米文学科一年次生、二年次生のために学習、研究指導の補助をしている。各教員は基礎学力が不足している学生に対して積極的にTAルームにゆき、指導を受けるように勧めている。

【教育学科】教育学科の退学者については、進路変更をのぞき基本的に教員が面談をおこなっているが、近年、精神的な問題で、登校できない学生が増加してきており、全学的なサポートと学科のサポートをどうつなげて行くかが課題である。

【書道学科】書道学科は、定例・臨時を問わず、必ず学科協議会の議題として「学生動向」を諮り、1、2年生のみならず3、4生についても出席状況を確認し合っている。出席の芳しくない学生については、1、2年生は学年クラス担任、3、4年生はゼミ担当

教員を中心に本人と連絡を取り合い、さらに職員からの本人への連絡、親への連絡、主任との面談という体制で取り組んでいる。

2012 年度の退学者数（除籍含む）は以下のとおりである（3 月 11 日現在）。（人数の右側の数字は退学率）

65 名%（日文 15 名 2.08%、中国 20 名 4.28%、英米 19 名 3.06%、教育 10 名 1.79%、書道 1 名 0.37%）

各学科において、よりきめ細かな取り組みが行われており、今後も継続していく。

所見	各学科でのきめ細かな対応が見受けられます。大学においては退学・在学を決めるのは結局のところ本人であり、大学に残るよう強制はできませんが、各学生が「自分は見られている」ことが実感できるような指導が必要と考えます。英米文学科で実行しているように、教員だけでなく大学院生も動員して、できるだけ多くのマンパワーを確保できるよう努力が求められます。
----	---